

第1章 葬送班

葬送班概要

山田 慎也

葬送班では、近年社会的関心の高まっている「終活」に関する実態の把握や行政における終活支援事業の取り組みといった現代の葬儀をめぐる動向、そしてまた葬儀を支えてきた地域社会や現代の葬儀産業の目指す方向など、社会が大きく変化するなかで、死をめぐる新たなつながりの形成について、現代の多様な状況をその歴史的な経緯もふくめて検討することを目的としている。

玉川報告「人々の終活行動と終活サポート事業の背景にあるもの」では、終活に関する性別、世代別の認識の相違をアンケート調査をもとに検討した上で、中京圏の生活困窮者の葬儀と終活に関する冠婚葬祭互助会の取り組み、また地方自治体の終活支援の検討を行っている。アンケートの分析によると、終活の認知度や希望する葬儀形態、費用において、女性の方がその認知度が高く葬儀の形態も簡易で安価な型式を希望しており、また年代別では高齢層のほうが現状を踏まえた実体的な判断をしていることが判明した。そして生活困窮者への葬儀については、通常は対応する必要のない読経なども互助会自体の社会貢献として行っている事例を紹介し、また春日井市の終活支援もまだわずかではあるものの単身者や高齢夫婦などの将来への不安を取り除いて安心を作り出し、引きこもりがちな人々への働きかけの必要性を指摘するなど、社会とのつながりを葬送や終活自体において新たに構築しようとする状況をみてとることができる。

山田報告「単身化社会における葬送儀礼とつながりの形成」では、終活支援が必要な単身の困窮高齢者の葬儀がどのように行われてきたか、それを支える社会的な仕組みについて、制度の変遷とともに、現在の行政の終活支援の実態を明らかにしている。近代以降、基本的には葬儀は家族がやるべきという規範が継続してきた。ただし大正期になると葬儀が行えないような困窮者に対しては、助葬事業が民間の社会事業として誕生し、その後救護法や生活保護法の制定によって、困窮者の葬儀を公的に支える制度が作られていったことを指摘した。そして単身高齢者もこの支援制度を活用して対処されてきたが、あくまでも例外的な対応として、家族が基盤という意識は維持されたままであった。しかし近年の急速な単身高齢者の増加により、その人の尊厳を守るための終活支援の試みが横須賀市で実施され、次第に他の市町村にも拡大するようになった。これは単身高齢者の社会的なつながりを維持し、また葬送や墓参を通して残された人々のつながりを構築しようとする営みであるともいえよう。

さらに従来の葬儀を支えてきた地域社会や、現代の葬儀産業の動向についても検討を行っている。大場報告「石川県における「生活改善」と冠婚葬祭の簡素化一類型化の試み」では、冠婚葬祭互助会の思想的基盤ともなっていた生活改善運動について、戦前から戦後を通して石川県の事例を中心に他県の取り組みも含めて検討している。生活改善運動には、例えば香典が負担だとしてそれをやめようとする「廃止型」と、婚礼衣装や葬具などを共有する「共同型」のタイプがあり、石川県は婚礼衣装や道具、また葬具や祭壇、霊柩車などの共有型が広く浸透した地域であるという。このような結婚式の場合には婚礼衣装、葬儀の場合は祭壇や葬具といった生活改善の取り組みが、冠婚葬祭互助会の浸透にもつながっていったこともうかがえる。さらにこうした取り組みを通して当時の地域社会のつながりを作っていた点も見て取ることができる。

田中報告「弔いとケアの融合—家族葬、および葬儀業のキャリアパスに関する事例研究」では、現代の葬儀産業が自らの業務をケアとして認識し、それを内面化していく様相を、家族葬への現在の対応と、葬儀産業従事者のキャリアパスの側面から明らかにしている。

家族葬に特化した専用会館の増加について、他の顧客と出会わずに最期の時を過ごせるという機能性は、自宅での看取りなど肯定的価値観などとも結びつき、葬儀のあり方自体が「遺族へのケア＝グリーフケア」という価値観を先鋭化させているものであり、これに沿ったサービスの模索として家族葬が一斉に浸透していったと指摘する。また葬儀業従事者の教育システムの中にも、葬祭ディレクター試験においてグリーフケアやホスピタリティーの事項が後に技能審査に加えられていったこと、また専門学校教育においても学生の認識からケアの文脈が反映されていることなどの検討から、ケアの認識が浸透していることを指摘する。さらに現在は葬儀業界に限らず社会的にも共通認識を持ちつつあり、葬儀業界がケア産業として志向することで、新たな価値を伴ったサービスを創造していく可能性を述べている。

以上のように、社会の個人化が進むなかで、死を迎え、葬儀を行う過程でつながりを維持、発展させようとし、当事者だけでなく葬儀産業や地方自治体などを含め、多様な機関が新たな社会の構築に向けて展開していることが把握できる。